苗族伝統集落の慣習法を活かした観光管理の研究

―中国貴州省雷山県における西江苗寨と郎徳上寨の議郎制度を事例として―

Management of Tourism Leading the Customary Law of the Traditional Miao Village
-Case Study of the Yilang Institution in Xijiang Miao Village and Langde Shang Village, Leishan County, Guizhou Province, China-

封 雨舟
FENG Yuzhou

1. はじめに

(1) 研究背景

中国貴州省雷山県に山間地域は数多くの少数民族が居住している。山間地域なので、貧困の割合が高い。外部の影響を受けない少数民族たちの村では、少数民族の生活風習と建築景観がそのままに継承されている。

少数民族地域の貧困問題を解決するために、「郷村観光」が有効手段と取られてきた。2008 年に観光開発が貴州省で開始された。巨大的な経済収入をもらったが、少数民族の文化財は観光開発によって影響され、価値が損害されている。この中で西江苗寨と郎徳上寨が注目すべき苗族村落である。政府主導で観光開発した西江苗寨が経済発展を重視し、村民生活の水準が高くなったが、開発過剰化の懸念がある。住民参画の開発をした郎徳上寨における文化財がよく保存されてきたが、村落の発展が停滞の状況に落ち予想がある。二つの村落は同じく「議郎」制度という苗族の伝統的な社会制度を利用し、それぞれに観光管理制度作り出したが、管理制度の効果が大きく違った。

図1　雷山県位置（著者作成）

(2) 研究目的

本論文は郎徳上寨と西江苗寨の社会制度「議郎」制度に視点を当て観光活動の歴史的変遷から「議郎」制度の関わりを明らかにする。

そして、郎徳上寨と西江苗寨の社会制度と観光開発制度を比較、観光開発制度の問題点を明らかにするとともに、観光開発と文化の保存を両立させる方法を考察する。

(3) 研究対象

西江苗寨は中国貴州省雷山県の東南部の雷公山山麓に位置し、中国で最も大きな苗族の村である。西江苗寨の苗族の文化は豊かで、多様性をもっている。

2008 年に、西江苗寨に対して政府主導の観光開発が始まった。村は巨大な経済収入を得た。しかし、西江苗寨の建築景観、苗族の社会制度と生活風習が観光の影響を受け、さらに苗族村民たちは観光収入の分配において弱者となっている。西江苗寨の苗族は文化財保存において、苗族村民たちを主体とした保存と開発が求められている。

郎徳上寨は中国貴州省雷山県の西北部に位置し、西江苗寨から 30 キロメートル隔たっている。中国の全国重点文物保護単位であり、ユネスコの世界遺産候補地である。

1987 年に、郎徳上寨は観光民族村として、観光開発が始められた。観光開発とともに、苗族の社会制度から生まれた、観光収入を公平に割り当て、当地住民の利益を考えた「工分制」という制度を採用している。また全国重点文物保護単位として、建築景観と生活風習がよく保存されている。ユネスコの世界遺産候補地となっているが、完全な保存体制が確立されていない。現在は政府と村民が保存と観光を両立させる、開発を進めている。

(4) 研究方法

(i) 文献調査

文献調査によって、中国国内の貴州苗族村落に関する研究、郎徳上寨と西江苗寨の観光開発経緯、苗族の伝統的な制度と歴史変遷に関する資料を整理する。

（ii）フィールド調査

2019 年 8 月と 2018 年 3 月 の 2 回にわたり、対象地における観光開発と観光管理制度について調査を行った。

（iii）比較研究

「議郎」制度について、郎徳上寨と西江苗寨の地理、歴史、規模と人口を基づいて、二つの村落における、「議郎」制度から生み出した管理制度の特徴と違いを明らかにする。次に、観光開発以後の保存制度と観光開発制度をピックアップし、各村の制度の歴史変遷を明らかにし、比較研究を通して観光開発の問題点を明らかにする。

2. 貴州省雷山県苗族村落の観光開発

（1）貧困問題と郷村観光

雷山県のような山間地域にある少数民族地域において貧困問題が多発している。貧困問題を解決するため、郷村観光が雷山県で始められた。

雷山県において、最初の郷村観光が始まったのは郎徳上寨である。1987 年に郎徳上寨は観光民族村に選ばれ、貴州省で最も早く観光開発が行われた。2008 年に政府主導の観光開発が西江苗寨で始まった。その結果、西江苗寨の観光客数は大きく増加した。雷山県の観光業収入は経済収入の大部分を占めるようになった。

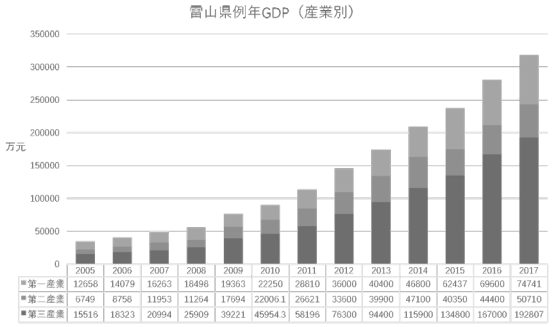

図 2　雷山県 2005 年～ 2017 年 GDP（産業別）注1

その一方、観光開発によって西江苗寨の元来の環境が影響を受けた。新築が大量に建設され、現地の村民たちの生活が変わった。苗族の文化的要素が観光のために変更させられた。政府主導の観光開発が行われる前は、観光活動は苗族の社会制度である「議郎」制度によって管理されていた。観光活動の管理において活用されることもある。村民参加、村民の自主発展が大切だということを考えるべきことである。

（2）苗族の「議郎」制度

伝統的な苗族の社会制度は「鼓社」、「議郎」と「理老」三つの部分から構成される。「鼓社」は苗族の伝統社会の組織形式である。鼓社は血縁関係の鼓社と地縁関係の鼓社、二つの種類がある。鼓社の首領は二人が存在している。一人の首領は「鼓藏頭」である。「鼓藏頭」は鼓社全体の事情を管理することだけではなく、祭日と儀式開催を担当している。もう一人は「活路頭」である。「活路頭」は「鼓社」全体の農業生産を管理している。「鼓藏頭」と「活路頭」の首領以外、一つの「鼓社」において一般的に他の七人のリーダーは存在し、「鼓社」の各事情を管理している。鼓社の中で、若干の氏族がある。各氏族の中で「寨老」というリーダーがいる。寨老は村の規範にしたがって氏族内の事情を管理し、議郎大会において、該当氏族の顧問のような役を担っている。

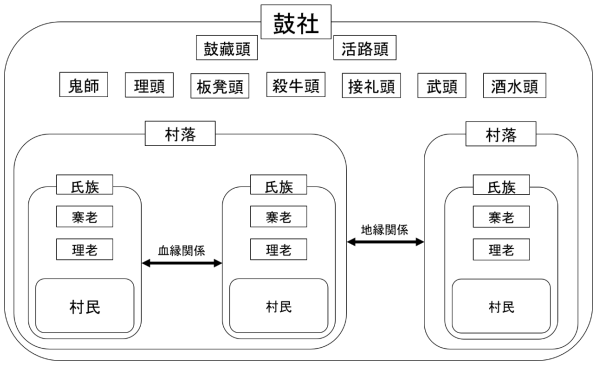

図 3　鼓社の構成（筆者作成）

鼓社における重大な事情の決定と規範の制定は「議郎」を通して村民全員に認められないといけない。議郎は一つの鼓社において物事を相談し、村落全員のための共同規範を作り、村民大会のような会議である。議郎は鼓社の村民全員に参加する。寨老は自分の氏族のことを提案し、各事情をアドバイスする。討論の議題はあるリーダーに関わると、そのリーダーの意見を参考にするべきである。討論された規範は村民全員に公表される。村民に認められたら、規範が成立される。この規範は「榔規」と呼ばれる。榔規を違反した人が発見され、もしくは氏族において紛争が出てきたら、「理老」によって解決される。現代社会の影響で、理老は徐々に「警察」、「村長」に置き換えられた。

3. 西江苗寨

（1）議郎制度の歴史的変遷

清政府の「改土帰流」注2政策に反抗していくつかの苗族の部族が蜂起した。村落が破壊された苗族の人は徐々に西江苗寨に集まり共に居住してきた。西江苗寨に多くの氏族が集まって居住し、大きな村の規模を保っているのはこのような歴史的背景によると考えられる。現在、14 の氏族が西江苗寨に居住している。「改土

帰流」以降、西江苗寨は中央政府によって管理されるようになったが、議郎は続けられた。

1949 年の新中国の成立後、「人民公社」注3と「文化大革命」注4の政策によって西江苗寨の「鼓社」は崩壊した。少数民族の風習は禁止されたため、各氏族の寨老の村落を管理する権利は失われ形骸化した。議郎大会は徐々に縮小され、血縁・地縁によって連合してきた各氏族の共同意識は薄くなった。

1984 年の「民族区域自治法」の成立によって、西江苗寨の祭祀、儀式などは復活することになった。榔規によって村の安定が維持され、伝統的環境を活かして西江苗寨の村民たちは自発的に観光活動を始めるようになった。伝統的な祭祀や苗族の祝日の盛大な儀式を見せて観光客を誘致した。西江苗寨は有名になって、多くの観光客が来るようになった。初期の観光活動では、観光客の誘致、民宿の値段設定などの理由のために村民たちあいだで紛争は少なくなかった。榔規をよく知る年長者たちは協力して観光活動の推進のために、観光活動に関するルールを作成した。この観光ルールに従って、村民たちが観光客を受け入れる体制が整っていった。観光活動の発展によって観光活動を管理している寨老たちは 1998 年に連合して「老年協会」 という組織を成立させた。

2008 年に西江苗寨は政府主導の観光開発が開始された。政府と観光会社の介入によって、村の村民委員会注5 は観光管理を任せられるようになった。観光管理における老年協会の役割は村民委員会にとってかわった。このように観光開発において村民と老年協会の意見は軽視されているので、村民たちによるデモ活動が起こった。老年協会はデモ活動を先導した非法民間組織とみなされ、デモ活動を解散させるように政府に命じられた。半年後、政府は新老年協会を成立した。新老年協会の構成員は村内に新しい観光ルートに関するデモ活動の村民を調停し秩序を維持しようとした。その結果、政府と観光会社は妥協して村民の意見を受け入れた。これを契機に政府、観光会社と村民の対立は終わり、政府と観光会社は村民たちの意見を受け入れながら観光開発を進めるようになった。

（２）文化財の保存を考えた収入分配制度

観光開発が進むにしたがって村民たちは自分たちの民家を利用して「農家楽」といわれる民宿やレストランへの活用を始めた。西江苗寨における建築物の分布から見ると、民宿、店舗とレストランは主に主要道路の周辺に分布している。(図 4)

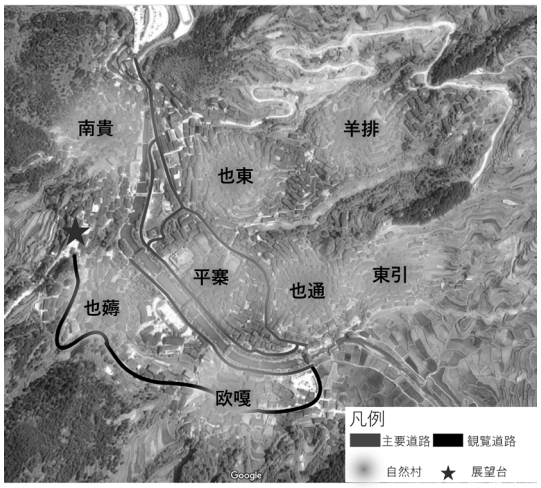

図 4　西江苗寨自然村分布

「西江苗寨秘籍」により著者作成

羊排と東引村は主要道路に離れて山中に位置しているため、羊排と東引を訪れる観光客数は多くない。羊排と東引村の村民は観光による利益を享受できないため、観光開発について前向きではない。前節に述べたデモ活動などはこのような格差が引き起こしたといえる。

収入差の問題を解決するため、2012 年に「雷山県西江千戸民族文化保護評級奨励（暫定）弁法」 （以下は奨励弁方と略す）を実施するに至った。奨励方法は西江苗寨の村民に対して、伝統的な建物物の保護、村本来の外観の維持、観光開発への協力などついて評価するものである。生活行為の評価は、評価細則によって土地占有、衛生状況、雑物処理の三つに分けられる。建築保護は、建築の築年数と建築の品格の二つの項目に分けられる。評価の採点作業は老年協会の寨老と建築保護委員会のスタッフによって行われる。

図 5　第一層はコンクリート構造の新築（筆者撮影）

観光収入の分配における民族文化保護奨励資金は、村民の収入差に関する問題をある程度に解決している。しかし奨励資金の目的とするところは観光開発の促進であり、文化の保存を目的にしたわけではない。観光開発を考慮した細則の評価項目は、コンクリート造を

組み合わせた吊脚楼景観建築物（図 5）を増やしていく結果となった。文化遺産から除外されるという西江苗寨の将来に大きな影響をもたらすことになった。

4. 郎德上寨

（1）議郎制度の歴史的変遷

清朝初期に「改土帰流」政策によって、貴州省における少数民族の蜂起が起こっていた。郎德上寨出身の楊大六[注6]は蜂起において、苗族の反抗軍の将軍の一人である。郎德上寨も反抗軍の拠点の一つになった。楊大六に率いられる反抗軍は清朝政府軍に全滅された。郎德上寨の村民は清朝政府軍に殺され、15 人しか生き残らなかった。村を継続していくため,「団結」を維持し、他人の倉庫、家に立ち入り禁止のような財産保護に関わる榔規がある。それだけではなく、人間関係については詳しく規定されている。その上、郎德上寨は農業生産で自給自足の村である。村の規模が小さく、人口が少ない。「鬼師」という村のシャマーは祭日と儀式の主催者として位置づけられる。「人民公社」と「文化大革命」によって、郎德上寨も影響を受けた。しかし、郎德上寨の村民たちは伝統的な儀式や榔規を重視する。このため、郎德上寨におけるシャマニズムの思想は消えていなかった。人民公社の解体と文化大革命の中止によって、郎德上寨での伝統的な祭日と儀式は復活された。鬼師の役割が保存され、今まで継承されてきた。

（2）工分制

1985 年に郎德上寨の元支書陳正濤の提案により、文化庁の支援に基づき、郎德上寨に対する観光開発が開始された。苗族の風習と儀式によって、「攬路酒」 、苗族踊り、銅鼓 と蘆笙 などのパフォーマンスに構成される「歓迎会」は観光客を迎える方法として設定された。しかし歓迎会は祖先の榔規を違反するという理由で村民に反対された。観光開発を進めるように鬼師と元支書は村民たちを説得した。観光活動を管理するために、村民委員会は「観光接客組」[注7]（以下は接客組という）を成立した。歓迎会を開催する時に、歓迎会に参加する村民は点数を書いているカードをもらう。収入分配の際に、歓迎会の収入と参加者数（カード数）に基づいて平均に分配する。このカードは人民公社時期に使用された「工分牌」と似ている。このため、このカードは村民に「工分牌」と呼ばれ、この分配制度も「工分制」と呼ばれた。歓迎会は「攬路酒」、パフォーマンス（図 6）と「団結踊り」三つの部分がある。各部分に参加して獲得する「工分牌」は違う。

図 6　パフォーマンス（筆者撮影）

村民は工分点数によって歓迎会の費用を観光収入として分配する。観光収入の分配は一ヶ月ごとに行う。一ヶ月における歓迎会の費用の 25%は村の共有収入としてピックアップする。共有収入は村のインフラ建設、建築の修復、歓迎会で必要な道具の購入、村の税金などとして使われる。残りの 75%は観光会社収入として各村民の工分点数によって分配される。

表 1　青年女性工分計算細則

年齢	攬路酒	パフォーマンス			団結踊り
		服装	役者		
中学生	銀衣牌 3/4	銀衣牌 3/4	役者牌 3		銀衣牌 8
40 歳以下	銀衣牌 3/4	銀衣牌 3/4	役者牌 5		銀衣牌 8
40～60 歳	盛装牌 2/3	盛装牌 2/3			盛装牌 6

観光開発の過程において、村民委員会と接客組は主導者の立場である。政府は村の支援者として村民とともに観光開発を推進してきた。

2017 年から郎德上寨の観光開発は「貴州省西江千戸苗寨文化観光発展有限会社」に所属している「雷山県郎德文旅発展有限責任会社」（以下は文旅会社という）を担当する。

（3）建築保存に関する制度

郎德上寨は全国重点文物保護単位である。村民委員会に制定された村民条約において、文物保護管理について詳しく記載されている。村において重点保護区と一般保護区（図 7）を設置している。保護区以内、レンガとコンクリート造の新築は禁止される。修繕の際に、建築の構造を変更しないという原則で修繕する。厳格な規定によって郎德上寨における新築は少なかった。しかし保護区以外、郎德上寨の西に約 400m を離れているところで新築はより自由に築ける。ここは村民に郎德新村と呼ばれている。郎德新村は保護区外なので、コンクリート（図 8）もしくは鉄筋構造の建築がある。

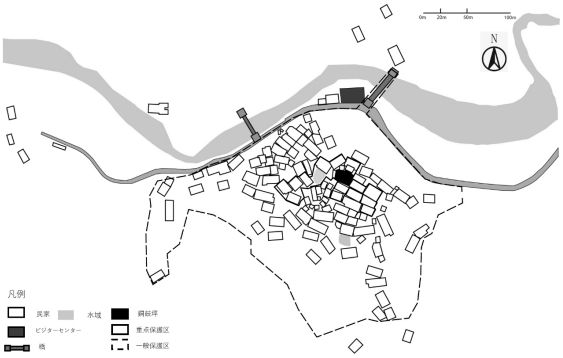

図7　2012 年郎德上寨建築分布

出典：「郎德上寨古建築群保護規劃」により、筆者作成

図8　コンクリート構造の建築　（筆者撮影）

5. 「郎德上寨」と「西江苗寨」に関する比較分析

(1) 「議郎」制度の変遷

表 2「議郎」制度の変遷に関する比較

	西江苗寨	郎德上寨
改土帰流	解決に関わる榔規が制定される。 寨老を中心とした議郎大会が位置づけられる。	団結の精神を強調する榔規が制定される。 鬼師を中心としたシャマニズムが位置付けられる。
人民公社	鼓社の首領の権利は喪失される。寨老の村落管理の権利がなくなる。 榔規の遵守によって、伝統的な風習は継承された。	氏族にとって受けた影響は少ない。 榔規と村の祈祷師「鬼師」は残された。
観光開発の初期	鼓社の首領と寨老が再びに村落を管理する。 老年協会と村民委員会、二つの自治組織が成立される。 老年協会の再成立によって議郎制度が放棄される。	鼓社の首領と寨老は村落管理に力を入れている。 観光接客組の成立によって議郎制度と村民委員会が融合する。 政府に介入されないので村民委員会の自治が維持される。

郎德上寨と西江苗寨は「改土帰流」と「人民公社」の影響を受けている。観光開発において、「議郎」制度を観光管理に関連させて村民自治をある程度反映させてきた特徴を持つ。議郎制度の歴史変遷から見ると、議郎制度は規模、多様な氏族構成と単一の氏族の構成、政府のかかわり方の違いが影響しているといえる。

(2) 収入分配制度と建築保護に関する制度

表 3　収入分配制度と建築保護に関する制度の比較

	民族文化保護評級奨励弁法	工分制
収入源	毎年の入場料の 18%	歓迎会の収入
実施関係者	西江景区管理局と観光会社 政府関係部門 村民委員会と老年協会	村民委員会 観光接客組
収入分配の方法	生活行為と建築保護の各項目にしたがって採点される。項目を達成するか否かによって点数をつける。点数が高ければ高いほど、分配でもらう補助金が高い。	歓迎会において担当する役割によって、その役割に応じる給料を分配してもらう。
建築保存	建築の築年数 建築の風格	重点保護区と一般保護区で新築禁止。 保護区以外制限なし。
効果	村民全体の収入を増やし、収入差を緩和。 観光活動による紛争を減少。 「吊脚楼景観」を維持。	歓迎会に参加する意欲を呼び起こす。 ある程度に伝統的な生活風習を維持。 吊脚楼建築の保存。
問題点	収入差の問題は存在。 苗族の風習は喪失される懸念。 吊脚楼景観の真実性に影響を受ける。	村民の生活が妨害される。保護区以外の地域で新築と土地利用については検討すべきである。
注：工分制の建築保存枠と建築保存に関する内容は節 5-3-2 の文物保護管理の村民条約からまとめた。		

観光開発に両村の村民自治組織のかかわりを見ると異なった発展が見られる。西江苗寨は基本的に村民委員会によって管理されている。村の収益を左右する観光事業に「老年協会」は関与することができない。郎德上寨では村民委員会が観光開発を管理しているが、村民委員会は祈祷師の「鬼師」や寨老と協力して観光管理を行うようになっている。郎德上寨では伝統的に継承されてきた「議郎」制度と新たな管理組織の村民委員会が融合する形になっている。

西江苗寨では政府と観光会社が、苗族の伝統的な風習に理解を示さず、利益中心の開発を目的にしている。郎德上寨では、政府は観光管理に介入せず、村民委員会の自治が尊重されるように、「議郎」制度に基づいた村民自治によって観光に関わっているといえる。

西江苗寨の奨励弁法は村民と政府、観光会社との紛争を緩和するが、村民の間に収入差を解決できないままである。現代的生活様式の浸透により、西江苗寨における苗族の文化喪失の懸念がある。郎徳上寨では村民委員会によって制定された工分制の制度を確立し、苗族村民の文化に基づく公平公正の精神を反映することができた。観光収入の分配制度を通して、苗族の伝統的な風習を観光資源として利用することは、貧困問題の解決と伝統的な風習の保存という両立できる方法であると考えられる。

建築保存において、西江苗寨は景観の見た目のみを重視した制度を実施したので、「吊脚楼景観」の真実性に影響を及ぼす可能性が高い。郎徳上寨は文物保護単位（国指定文化遺産）であるので、高い保存措置が行われている。このため、伝統的な建築がよく保存されてきた。

伝統的な吊脚楼建築の保存を進めるとともに、生活水準向上のための措置も必要と考えられる。苗族の文化の継承と観光による生活水準の向上というバランスをとった方法が求められる。

6. 結論と考察

（1）結論

本研究は、中国貴州省雷山県の郎徳上寨と西江苗寨を対象として、観光管理における苗族伝統集落の慣習法の変遷と利用について研究することを目的にしている。そして苗族伝統集落の慣習法を活かした管理制度の状況を理解するために、現地におけるヒアリング調査や資料収取を行い、調査によって得られた資料を基に苗族伝統集落の文化的要素の保存方法について考察を試みた。

政府と観光会社による観光開発への介入は、村民自治に影響を与えることが確認された。村民自治は観光開発の利益を村民に分配することに対して調整の役割を果たすことを明らかにした。それは貧困問題を解決することにつながり、伝統的な風習も保存することができる可能性を持っている。苗族の村民は自分たちの要求にしたがって建築物を改造し、新築を築く傾向があるため、伝統建築を保存する意識が高いとは言えない。村民の経済力、生活力向上と伝統的環境の保存につながる活動をそれぞれ両立させる方法が求められている。

（2）考察

苗族は伝統的な風習を重視する民族である。「議郎」制度と「議郎」制度に制定された「榔規」は今まで苗族の生活に影響を与える。苗族村落の管理において、村民自治は強調される。観光管理に寨老の役割を取り入れることが大切と思われる。場所によっては寨老が観光活動に関わっていない村落がある。これらの村落は寨老を活かして、観光活動規範の制定、秩序の維持、収入の分配などに協力してもらうことが望ましい。

苗族村落における風習と文化は似ている。同じに歓迎会の観光手段を利用すれば、苗族村落は同質化する可能性がある。各苗族村落における特長を活かし、その特長を観光資源として持続可能な開発を行わなければいけない。

貴州省雷山県における苗族村落で貧困問題はまだ解決していない。このため、経済的な利益で村民の行為を導くことは現時点において有効手段であると考えられる。苗族の少数民族の継承してきた文化と観光の持続的成長が、貧困問題を経済的に解決しながら苗族の誇りを失わずに活躍できることにつながると考える。

注

1) 雷山県人民政府サイト http://www.leishan.gov.cn/mlls

2) 清朝初期に王朝中央政府による地方の少数民族地域を直接支配するという政策である。苗族に対して漢民族の姓を強要し、漢人戸籍として登録させた。

3) かつて中華人民共和国において農村に存在した組織である。

4) 1966 年から 1976 年まで続きいた文化の改革運動である。

5) 農村にある正式な行政組織に含まれない村民組織である。

6) 楊大六, 本名は陳臘略である。郎徳上寨出身である。清朝咸同時期、苗族反抗軍の将軍である。

7) 「旅游接待小組」から筆者により訳する。

参考文献

1) 高田晋史・宮崎猛・王橋（2011）「地域経営型郷村観光の組織構造と運営に関する研究―中国貴州省雷山県郎徳上寨を事例にして―」，農林業問題研究，第 184 号，pp347-356.

2) 廷貴・酒素（1981）「略論苗族古代社会結構的“三根支柱”―鼓社、議郎、理老」、貴州民族研究，第 4 期，pp42-47.

3) 黔東南苗族ドン族自治州地方志編集委員会（1992）『黔東南苗族侗族自治州志』，貴州人民出版社.

4) 田豔・胡曼（2007）「苗族村寨的伝統“榔規”和現代“工分制” 社会治理調査」，中央民族大学学報，第 231 期，第 44 巻，pp5-12.

5) 李麗（2008）「郎徳運用“工分制”経営郷村旅遊対和諧郷村建設的啓示」，『貴州師範大学学報（社会科学版）』第 151 期，pp55-60.

6) 李麗(2008)「郎徳工分制中的道義、理性与習慣―農民行為選択的田野研究」，貴州師範大学，歴史文献学，修士論文.

7) 李欣華・呉建国（2010）「旅遊城鎮化背景下的民族村寨文化保護与伝承 貴州郎徳模式的成功実践」，広西民族研究，第 102 期，pp193-199.